

# 子どもの本

研究会



【私の一冊】

せなけいこさんの自伝的絵本『ねないこは わたし』(文藝春秋、二〇一六年刊)



三宅 興子

絵本作家せなけいこさんが、『にんじん』『もじゃもじゃ』『いやだいやだ』『ねないこだれだ』(箱入り小型絵本四冊セット「いやだいやだの絵本」福音館書店)を刊行されたのは、一九六九年のことでした。キャッチコピーは「おかあさんのつくった絵本」、「貼り絵」で作った単純で手作り感溢れる絵本でした。

児童文学を手探りで教え始めたころでしたので、新刊絵本には、熱心に目を通していました。ちょうど、日本では、オリジナリティーのある創作の絵本が次々と出版される時代でしたが、せなさんの絵本は、これまでに出会ったどんな絵本とも全く違う表現でおもしろく感じました。デイク・ブルーナの「うさこちゃん」(現在では「ミッフィー」と対象年齢は似てはいるのですが、「うさこちゃん」のような物語ではなく、一冊で一つのテーマを扱っていたため、教育的で脅迫的な「しつけ絵本」であるという否定的な書評が出たりしました。

なぜ、これらの絵本に魅力を感じるのかわからなかった私の「蒙をひらいて」くれたのは、妹が生まれるのでおばあちゃんの家に預けられていた三歳近い姪でした。『ねないこだれだ』を一度、読んだだけで覚えてしまい、毎晩リクエストされました。そして、「おばけ」は怖いけれど、大好きでもあるという、「怖い絵本」をあえて読んでほしい幼児のこころの秘密を知ったのでした。そういえば、絵本の歴史は「怖い絵本」の歴史でもあったと納得がいったものです。

それから四十年以上経って、せなさんの『ねないこは わたし』を読みました。ユニークな自伝です。絵本作家になろうと、武井武雄先生のもとで、長い修行をなさった「おかあさん」だったのですね。これまでに創った絵本を使って、絵本の真髄を伝えてくれます。せなさんは「おばけになつてとんでいけ」と言われたら「いいよ、とんでいくよ」という子がいる、私の娘もそうだったと書いておられます。絵本好きにおすすめの一冊です。( )

(梅花女子大学名誉教授／大阪国際児童文学振興財団特別顧問)